「キリストによって示された神の愛」（ローマ八章三一～三九節）

1　聖徒の日

今日は、日本キリスト教団の行事歴で聖徒の日、逝去者を記念する礼拝が捧げられる主日です。

多くの教会でこのことが覚えられていると思います。私どもも、主にあって召された方々を記念し、命の主である神への信仰を新たにしながら、一日を過ごしたいと思います。

亡くなった人を何らかの形で記念することは、もちろん教会だけで行われていることではありません。おそらくそれは私ども人間の心に深く根差した欲求であり、そのようなものとして、どのような形であっても、どのような宗教によるとしても、人間らしく生きることの一部です。

教会でも、初代教会以来、そのような死人を記念することが行われてきました。そもそも私どものこの礼拝が、イエス・キリストを記念すること、その死と復活の記念でもあります。

聖書で「記念する」という言葉には「思い起こす」という意味があります。過ぎ去ったこと、昔のことを覚えるというだけではありません、それを現在と関係していることとして思い起こすのです。それはとくに、イエス・キリストについて言うことができるし、言わなければならないことです。イエス・キリストを思い起こすということは、イエス・キリストがいまここにいてくださる、聖霊によって臨んでいてくださる、ということです。ここにイエスがおられるということ、それが礼拝を礼拝たらしめているものです。

さて教会で為されてきた逝去者の記念の形の一つは、死者のために祈るということでした。

古代ローマの地下墳墓、カタコンベと言われる場所ですが、その壁、あるいは石の棺などに、両手を挙げ天に向かって祈る姿など、「オランス」（祈る人の意味）というのが描かれています。レクイエムという音楽があるのは、ご存じの方も多いと思います。レクイエムとは、安息を、とか、平安を、という意味です。死んだ人を記念する礼拝は、この言葉で永遠の安息が与えられるように祈るところから始められていたのです。

この死者のために祈るというところから、死んだ人の運命は祈りによって左右できるというような考えも出てきたのです。死んだ人のための執り成しの祈りと、そのための特別な犠牲を献げることによって、つまり生きている人の功徳で「煉獄」と呼ばれる場所にいる死人は天国という命の場所へ行くことができる、地獄の沙汰も金次第ということでしょうか、そうした逸脱した考えや習慣も、宗教改革以前の教会にはあったようです。

しかし聖書の考えは違います。ペトロの手紙には、キリストが霊において陰府にまで下り、そこで死んだ者にも福音を語り伝えたというような意味のことが書いてあり

ますが、少なくとも、私どもが死んだ人のために執り成すことを勧められても、求められてもいるわけではありません。死者については信仰と希望をもって神の御手にゆだねるべきです。

また人が死んで神になったり、仏になって礼拝の対象になるということがあってならないのはいうまでもありません。

むしろ聖書は、例えばヘブライ人への手紙で、主にあって召された人々を主の証人として思い起こすように、私どもに呼びかけています。

わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競争を忍耐強く走り抜こうではありませんか（一二・一）。

今日の主の日、この永眠者記念礼拝で、私どもは、主にあって召されたお一人おひとりを、そのイエス・キリストの証人としての歩みを、感謝をもって思い起こしたいのです。またご関係の方に慰めを祈りたいのです。それだけでなく私どもがこれらの証人の足跡に従って行くことができるように、私ども自身の信仰の歩みのためにも祈りたいと思います。

2　神の愛は永遠

さて今日の聖徒の日、召された方々について、私どもがはっきり知っておくべきことは、この方々に生前神が与えてくださったその愛は、神が永遠でいますゆえに、永遠であるということです。

ここに写真の掲げられている人たち、掲げられていない人もいます。また今年逝去された方々、それぞれお一人おひとりに神はご自分を現され、関わりをもたれ、ご自身のものとしてくださったのです。もちろん、その具体的なことは、それぞれに違います。関わりを持とうとする意志、それが愛とすれば、みな神の愛を受けて人生を送られたのです。

その神がつくってくださった結びつき、それを壊すものは何もない。その人々を神から切り離すものは何もないと、今日の聖書箇所、ローマの信徒の手紙は、力強く私どもに語っています。

今日の箇所から、二箇所、もう一度読んでみます。

だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。「わたしたちは、あなたのために、一日中死にさらされ、屠られる羊のように見られている」と書いてある通りです（三五～三六節）。

わたしは、確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造

物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです（三八～三九節）。

はじめの三五～三六節のほうは、使徒パウロが激しい迫害を受けながら、ローマ帝国中を歩き回って伝道していたその時の困難を書き出しているものだと思います。それがどのようなものであろうと、それが私をキリストにおける神の愛から切り離すものではないと言っています。

後の方、三八～三九節は、私どもが生活の中で直接出会うものではなく、私どもを取り囲む目に見えない力、時代精神などというのも入っているかも知れませんが、あるいは、その中には悪の霊のようなものも入っています、そうしたものを指しているのだろうと思います。「命も」というのは、私どもが、毎日取り組んでいるもの、たとえば仕事でも、趣味でも、そうしたことの魅力にとりつかれ、振り回されて、結局神から離れていくということもあるのです。いや、それはどんなに多いことかと思います。

いま二つの箇所で私どもが見たのは、人が生きている間のことを指していることは明らかです。しかし使徒パウロは、ここで、人が死んでからのことも語っています。

だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。だれがわたしたちを罪に定めることができましょう。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです（三三～三四節）。

先ほど読んだ二箇所（三五～三六節、三八～三九節）がこの世でのことを言っているのに対して、ここは明らかにこの世ではなく、かの世、来るべき世でのことを言っています。

もっと重要なことは、来るべき世のことが、一つの裁きの場を想定して語っているということです。このローマ人の手紙の後のほうで、パウロは、「わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです」（一四・一〇～一二、二コリ五・一〇参照）と言っています。

この神を裁判官とする法廷で、たとえだれがその人を訴えたとしても、人は裁判官たる神によって義と、正しいとすでに宣せられている、この神の、いわば無罪宣告に優越するもの何もないのです。のみならず、その人の弁護人もそこにいます。それがキリスト・イエスです。来たるべき世にあっても、主にあって召された者を、神から切り離すものは何もないのです。この世でもあの世でも神の愛は貫かれている、それがパウロのいまここでの確信です。

3　わたしたちの味方

なぜ「神に選ばれた者たち」（三三節）から、いったん結ばれた神との絆が断ち切られることは決してないと言うことができるのでしょうか。毎日の生活の中で、神か

ら自分を切り離してしまうものに私どもは囲まれていると言うのに、です。たとえ人間が神から離れても、神は私どもを離れないと、どうして言うことができるのでしょうか。

今日の聖書箇所に、聖書の神はどのような神かを示す、小さいけれども大切な言葉があります。

それは「わたしたちのために」という言葉です。この同じ言葉が、ここに三回も出てきます。三一節、三二節、そして三四節です。三一節は、神は「わたしたちの味方である」とあります。「味方である」と訳されているのが、元々は「わたしたちのために」です。三二節、「わたしたちすべてのために」。そして三四節、「わたしたちのために執り成して」です。

「わたしたちのために」います神。簡単な言葉ですが、聖書の神を示す、ある意味では革命的な言葉です。

というのも、神というのを、人は一般にそんなふうに考えていないからです。あえて言えば、神というのは、人間を超越し、人知をもってははかることのできない力をもち、しかも隠れていて、私どもを幸いにしたり、禍をもたらしたりす、それゆえ恐れるほかない、そうならないように祭ったり、拝んだり、祈ったり、そんなふうなイメージをもっています。私ども、キリスト者でも、多かれ少なかれ、そういった観念をもっています。

もちろん聖書の神も、超越的で、絶対的で、全能で、この被造世界を支配しておられる、そういう点で、人が何となく感じていることとまったく違うというわけではありません。

しかしそれだけでない面が、聖書の神にはあるのです。それが「わたしたちのために」の言葉です。神はわたしたちの味方であるということです。そして使徒パウロは神はわたしたちの味方、わたしたちのためにいます、その証拠をイエス・キリストの十字架に見ています。

わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありましょうか（三二節）。

「わたしたちのために」、私どもが罪赦されて、神との関わりに生きるために、その罪を贖うために神はご自身の独り子を犠牲としたのです。それ以上ない大切なものを献げた、それは、私どもを、私どもすべての者を、それに値しないにもかかわらずご自分の独り子と同じく大切なものとしておられるからです。

そのようにして神は私どもとの関係を保ってくださったのです。私どもがその関係を維持しなければならないというのではありません。神が私どもとの関係を保ってくださるのです。

この一年で逝去された方のお名前が週報に記してあります。また写真も前に飾ってあります。

これらのお名前を見ながら改めて感謝せざるをえないのは、皆さんが、死という最大の危機に際しても、お一人おひとりに注がれたイエス・キリストの愛をしっかり確

信されて、死においても、死を越えて、そうした神との絆がしっかり保たれたまま召されたことです。そのことを今日、ご関係の皆さまも、そして私どもも確信して栄光を神に帰したいと思います。

（二〇二〇・一一・一　聖徒の日）